

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

虎の門病院消化器外科（下部消化管）での国内研修を終えて

横浜南共済病院外科

小野寺 篤

この度、令和7年度日本臨床外科学会の国内外科研修プログラムにより2025年8月25日～8月31日までの1週間、虎の門病院消化器外科（下部消化管）で研修をさせていただく機会を賜りましたので、ここにご報告させていただきます。

私は横浜市立大学外科治療学教室に入局後、関連病院で研修し、現在は横浜南共済病院外科にて勤務しております。内視鏡外科技術認定医を取得すべく日常診療に励んでおりますが、なかなかうまくいかず閉塞感を抱いておりました。そこで、大腸癌手術の98%を鏡視下手術で行っている国内有数のhigh volume centerである虎の門病院消化器外科（下部消化管）での研修を今回選択させていただき、何か突破口を開くことができると考え応募させていただきました。

研修期間中は主に手術見学をさせていただきました。

何よりも感じたことは手術の一体感でした。スタッフ全員の手技が統一されているため、たとえレジデントの先生の執刀でも淀みなく手術が進んでいくことに大変感銘を受けました。その上で、郭清範囲や血流評価については黒柳先生をはじめ上級医の先生からの指導があり、かつ学年が下の先生たちもディスカッションに参加し、手術中でも、とても活気のある雰囲気で行われていきました。私よりも医師年数の浅い先生たちでも手術手技に対する考え方をしっかり持っており、改めて自らを律するいい機会となりました。そして、特に感動したことはDST吻合の際、可能な限り全周性に補強をしていることでした。「手術終わってからあの時こうしておけばよかった、そんな後悔するくらいなら多少時間がかかっても患者さんのためを思って補強するようになったんだよね。」と黒柳先生に教えていただき、外科医として忘れてはいけない気持ちを感じました。

また、手術器具は基本的に電気メスを使用しており、レジデント・フェローの先生でも扱いに長けていました。今まで自分ならLCSを使用していた場面でも、電気メスを用いることで剥離層を維持しながら手術を進めることができ、大変有益で、今後は是非習得したいと感じました。

レジデントの先生方に対し、黒柳先生が「次に何を切ってこの後どうしていきたいのか、それが他人に分かる手術をしなさい。」という言葉に、いざ自分の手術動画を見返してみると手技の意図がくみ取れない場面も散見され、ここを改善していくと技術認定医への道が開かれるのではないかと思います。そして、フェローの先生方には「この手術ならいつでも技術認定とれるね。」と話されており、レジデント3年+フェロー3年でここまで成長できる虎の門病院で、この度研修できたことを大変有意義に感じました。

可能であればこのまま虎の門病院で働きたいと強く思いましたが、今回、実際に目に焼き付けたことを自施設に持ち帰り、それを伝え日々の診療に取り入れていこうと思います。

末筆となりますが、このような大変貴重な機会を与えていただきました、日本臨床外科学会会長の万代恭嗣先生、国内外科研修委員長の高山忠利先生をはじめ学会事務局関係者の皆様、研修を快諾いただきました虎の門病院副院長・消化器外科部長の黒柳洋弥先生、アテンドいただきました花岡 裕先生ならびにスタッフ、フェロー、レジデントの先生方、さらに推薦いただきました横浜南共済病院の佐伯博行先生、不在中に業務を担っていただきました外科スタッフの先生方に厚く感謝申し上げます。